ストックホルムの密使

The Mission from STOCKHOLM

佐々木譲

新潮社

ストックホルムの密使

佐々木譲

新潮社

●新潮ミステリー倶楽部特別書
譲・ささきじょう●発行者・佐藤
62東京都新宿区矢来町71／振替東
6）5111・編集部03（3266）
本所・大口製本印刷株式会社●価格はカ
本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下
たします。
●発行・1994年10月30日
© Jō Sasaki 1994, Printed in Japan

下ろし●ストックホルムの密使●著者・佐々木
亮一●発行所・株式会社新潮社・郵便番号1
京4－808／電話・営業部03（326
5411●印刷所・株式会社精興社●製
バーに表示してあります●乱丁・落丁
さい。送料小社負担にてお取替えい

ISBN4-10-602735-6 C0393

目次

第一部 5
第二部 109
第三部 215
第四部 307
第五部 489

装画　生頼範義
装幀　平野甲賀
新潮社装幀室

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

ストックホルムの密使

この重大な情報を確実に日本へ届けようと、夫はふたりの人物をストックホルムから送り出した。終戦の年、一九四五年の、七月末のことである。送り出した後は、ふたりの消息は一切聞かず、戦後になってからも、ふたりに託した情報が届いていたという話は聞いたことがなかった。夫もわたしも、彼らは途中事故にでも遇い、そのままにしてしまったのだろうと思いこんでいた。混乱の時期であったし、そのふたりの身の上に、どこで何が起こってもふしぎはなかったのだ。でも、戦後二十年以上もたってから、わたしたちは真相を知ることになった。夫が送り出した密使は、終戦間際のあの悲劇を救うことのできた情報を、まちがいなく、たしかに東京まで届けていたのだ。適切な対応が、まだ可能であったタイミングで……

大和田静子「バルト海を偲んで」（私家版回想記）より

第一部

六月一日　パリ

サロンの中のざわめきが、ふいに小さくなった。冷たい風が吹きこんできたようにも感じられた。

森四郎は、カードを手にしたまま顔を上げ、入口に目を向けた。立ちこめる煙草の煙ごしに、ふたつの人影が見えた。コート姿、ソフト帽を目深にかぶった男がふたりだ。両手をコートのポケットに突っこみ、胸をそらして、入口からサロンの内部を見渡している。

すぐに察しがついた。ドイツの秘密警察たちだ。あの陰気な風体と、尊大そうな態度だ。けっして、カード博打の相手を探しにきた民間人たちではない。ふたりだけということは、この非合法の賭場の手入れというわけでもないようだ。誰か、占領軍の重要人物に用があって、このサロンにやってきたのだろう。ゲームは続けることができる。

四郎はふたつの影を視界の隅に入れたまま、配られた七枚目のカードをたしかめた。セブン・スタッド・ポーカーの、最終のラウンドだった。

札は、ハートのジャックだ。

オープンのカードはほかに、ダイヤのクイーン、スペードのクイーン、ダイヤの9、クラブの9だ。オープンのカードだけで、ツーペアの手ができているということになる。

裏向きの最初の二枚のカードは、クラブの8とハートの10だった。つまり、いま自分はストレートを手にしているのだ。しかし、はたからは、フォアカードかフルハウスを手にしているように見えるはずだ。

ほかの五人のプレーヤーのうち、ふたりはすでにダウンしていた。

パリ駐留のドイツ国防軍の将校が、このラウンドのオープナーだった。彼は、ダウンを宣言した。やつの勝負の読みは、手堅い。

四郎の番となった。

残ったふたりは、さあどうするね、とでも言うように、四郎を見つめてくる。ルーマニアの外交官と、ドイツ空軍の操縦士だ。

決まっているさ。

この二時間あまり、四郎はほとんどブラフで勝負に出たことがなかった。相手がたには、四郎は堅実な張り方をする男という印象が植えつけられているはず。慎重な勝負のために、これまでの稼ぎはせいぜい五百マルクほどだろう。しかし、みな興が乗ってきて、一回の掛け金が上がってきた。そろそろ、大きく勝負に出てもいい頃合いだ。この勝負では、すでにテーブルの上には、千マルク近い額のチップが積み上げられている。

サロンの入口では、秘密警察らしき男たちが、四郎に目をとめた。ふたりが小さくうなずき合ったのがわかった。男たちはすぐに部屋をこちらに向かって歩きだした。

おれに用事なのか？　ゲシュタポが、このおれに？

四郎は緊張を隠して、百マルク分のチップをテーブルに張った。フラッシュか、フルハウスの可能性との勝負だが、強気で行け。

ルーマニアの外交官もダウンを宣言した。ドイツ空軍パイロットの手をフルハウス、四郎の手をそれ以上と読んだのだろう。

ドイツ空軍のパイロットは、かすかにためらいをみせた。四郎の手を読みかねているのだ。フォアカードか、クイーンがらみのフルハウスか。それとも9を頭のフルハウスなのか。ストレートで勝負に出てきたとは、夢にも想像していまい。

葉巻に手を伸ばしてから、彼は言った。

「ダウン」

いただきだ。

こういう状況では、と四郎は思った。強気に出て成功するようだ。

秘密警察らしきふたりの男は、テーブルのあいだを縫って、部屋を横切ってきた。男たちの歩みに連れ、沈黙も部屋の中を移動した。その場から立ち上がり、通路を開ける女もあった。小間使い姿の煙草売りの娘は、素早く壁際に歩いた。四郎と同じテーブルについているドイツ人軍人たちも、手をとめて男たちに目を向けた。

ピガール広場に近いナイトクラブ、その裏手の特別室だった。金払いと信用に問題がない、と判断された客だけが通される秘密のサロン。ルーレット盤こそ置かれてはいないが、ディーラーはいた。事実上、カジノと同じ楽しみが提供される部屋だった。ついているならば、極上の女から、いまや法外な値のついたスコッチまで、手に入れることができる。秘密警察の気分次第では、十分に摘発の対象となる非公認の賭場だった。

近づいてきた男たちは、四郎の背後に立った。両側から、四郎をはさむような恰好だった。年配の男は黒い革のコートを着ており、もうひとり、若いほうはオリーブ色の軍用コート姿だ。ふたりとも、両手をコートのポケットに入れたままだ。

テーブルについていた客たちは、みな黙りこみ、身じろぎしなくなった。ドイツ国防軍の将校も、空軍のパイロットも、居心地が悪そうにゲシュタポたちから視線をそらした。

年配の革コートの男が、ドイツ語で四郎に訊いた。

「モリ・シロー、という人物を探しているのだが、きみかな」

四郎は、テーブルの上のチップを手元に引き寄せながら、短く答えた。

「ウイ」

「ドイツ治安警察の者だ。ドイツ語は話せるか」

四郎はフランス語で言った。

「ここは、パリだぜ」

年配の男は、一瞬眉をひそめたようだった。

「主人は、わたしたちなのだよ」

「ほう」四郎は顔を上げ、そのゲシュタポの男を見つめて言った。「いっときの間借り人だと思っていた」

「ドイツ語は理解できるわけだな」

四郎は、ドイツ語に変えて言った。

「大事なカード相手の使う言葉だからな」

「同行してもらえるかな。ひとつ、確認したいことがあるんだが」

「なんだ？　おれの魔羅に、割礼の痕跡でも探そうと言うのか」

治安警察の男はまた眉をひそめた。四郎の下品な言い方が気に入らなかったのだろう。

「ドイツ人が嫌いのようだな」

「秘密警察が苦手なのさ。どこの国のものだろうとな」

「どうなのだ、同行する気があるのか」

「あんたたちの要求を、これまで拒んだ人間がいるのか」

「まだ、出会ったことはないな」

「では、おれも、例外になるわけにはゆくまい」

四郎はディーラーと六人のカード相手たちに会釈し、チップをまとめてディーラーの前に押しやった。

「ジャン、これを預かってくれないか。すぐもどるから」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

四郎は、ディーラーにチップの中から二十マルク分ほどを取って渡した。
初老のディーラーは、小さく言った。
「ありがとうございます。バロン」
ゆるんでいたタイを直すと、四郎はもう一度その年配のゲシュタポを見上げて言った。
「同行する前に、用件をもう少し詳しく聞かせてくれ。このサロンに、おれがいかさま賭博で引っ張られたなんていう噂を流されたくない」
革のコートの治安警察官は、皮肉な調子で言った。
「もっと悪いことかもしれんよ。おとつい、ロンシャンの競馬場で、ドイツ軍人を狙ったテロがあったのだが、知っているか」
「さあ。馬には関心がないんだ」
相手は、四郎の言葉の毒には気づかなかったようだ。彼は続けた。
「ロンシャンで、ドイツ国防軍の将校がひとり、撃たれて死んだ。犯人たちはひとりがその場で死に、ひとりが逃げた。きょうの午後になって、その逃げたひとりが逮捕された。アルベール・ロランという男だが、知っているかね」
アルベール・ロラン。
顔色は変わらなかったはずだ。その名を聞いても、自分の表情には、人からそれとわかるほどの変化は出なかったはずだ。
「知らん」四郎は、首を振った。「レジスタンスとつきあいはない」
「じゃあ、訊くが、サンジェルマン・アン・レーの、サンドニ通り二八というアドレスに心当たりはあるか」
「サンジェルマン・アン・レー?」しらばっくれるか。それとも、一部だけは認めるか。この場合は、どちらで押すのがいいだろう。一瞬の後に四郎は判断した。「そこに、おれは田舎家を借りているよ」
「アルベール・ロランという男は、きみのその田舎家に潜んでいたのだよ」
「夏のあいだしか使わない小屋だからな。今年はまだ行ったことがないんだ。勝手に入りこんでいたんだろう」
「小屋からは、武器も発見された。中にはトンプソン短機関銃も混じっていた。連合国から援助を受けていないかぎり、手には入らない武器と思うが」
「おれには関係がないって」
「アルベール・ロランという男とは、まったく面識はな

いというのか？」
「おれの知ってるアルベールは、レジスタンスじゃない」
「本人も、そう名乗ってはいなかったと思うがね。とにかくわれわれの用件というのは、その男を見て、きみの知り合いかどうか、確認してほしいということなのだよ。知り合いではないと言うのなら、なぜきみの所有する小屋が、テロリストたちの隠れ家になっていたかということだが」
「おれには、答えようがない」
「とにかく、そのテロリストを見てもらえるかね」
「いいだろう」四郎は椅子から立ち上がって言った。
「どこに行くんだって？」
「一緒にくればわかる」
ゲシュタポは、テーブルの上の四郎のカードをすべて広げて見て、つけ加えた。
「こんな手で勝負するとは、大胆なことだな」
車は、黒いメルセデスだった。本国からわざわざ運んできたものにちがいない。
四郎はそのドイツ製の乗用車に乗りこんだ。ふたりの治安警察官が、四郎を両側からはさみこんだ。若いゲシュタポが後部席の扉を閉じると、車はすぐに深夜のピガール通りを発進した。
灯火管制はおこなわれていないとはいえ、戦時下の、すべてに不足がちのパリだった。街路は暗く、両側の建物の窓にも、大部分明かりはない。
四郎は、窓の外の暗い街路を眺めながら、自分の運も尽きたのだろうかと考えた。それとも、まだ十分に逆転は可能なのかと。
常識で考えるなら、ゲシュタポになんらかの容疑をかけられて、疑いをあっさり晴らすことができるとは思えない。なんといっても、アルベール・ロランとの関係は事実なのだ。その証拠を探しだすにも、手間はかからない。アルベールの立ち回り先のカフェでも二、三軒当たれば、この自分とのつきあいはあっさり証明される。問題は、自分がレジスタンスの活動とは無縁であることを、なんとか連中に納得させることだった。アルベールがレジスタンスに加わっていることは、まったく知らなかったと。サンジェルマン・アン・レーの小屋は、アルベールに勝手に使われていたのだと。連中は、それを聞く耳を持っているだろうか。

四郎は、大戦が始まった当時の、自分の見通しを思い起こしてみた。寝物語に女に語ったり、博打仲間と話したりした、見通しの数々。

ひとつ、パリは一九四四年の夏までに解放される。ひとつ、戦争は、一九四六年の春までに終わる。ひとつ、自分はパリで晴れやかに終戦の日を迎える。

最初のふたつはともかく、と四郎は暗い街路に目をやりながら思った。三つ目に関しては、どうやら大はずれの可能性が強い。しかし、逮捕が免れないものであるにせよ、自分はレジスタンスに加わっているわけでもないし、ドイツ人を殺したわけでもない。せめて労働キャンプ送りのところで、踏みとどまりたいものだった。労働キャンプへの収容なら、生きて終戦を迎えることは十分可能だろう。解放されたパリを、もう一度この目で見ることも。

願わくば、逮捕された男というのが、自分の知っているアルベールとは別人であることだ。それであれば、しらを切り通すことも可能だ。ゲシュタポの言葉を思い出しても、逮捕された男が自分との関わりを認めたようではなかった。四郎の知らぬ誰かを、アルベールと取りちがえているのかもしれない。小屋の鍵については、盗まれたとでも言い張るか。

とにかく、生き延びることだ。生き延びるために、自分の持てる力をありったけ注ぐことだ。さいわい自分には、生来身についた名も誇りもない。生命と引換えにしてでも守るべき信念も持たなかった。卑劣と言われようと、人でなしと罵られようと、たとえこのゲシュタポたちの尻の穴をなめることになろうとも、それでも生き延びることのほうに価値がある、というのが、四郎の生の単純な原則だった。たとえこの先、生涯ブタと呼ばれることになろうと、そのブタの生だって、死ぬことに較べるなら百倍も素晴らしいのだ。

四郎は、走る車の中で、自分の原則をあらためて確認した。ブタになることで生命が保証されるのなら、自分はブタになってみせる。なんのこだわりもなく。

乗用車が停まったのは、予想したとおり、フォッシュ街七四番地だった。パリっ子が、その前までくると、わざわざ反対側の歩道にまわるという建物の前だ。ゲシュタポ本部である。親衛隊の徽章をつけた兵士たちが、歩哨に立っていた。

車をおろされ、両腕を抑えられたまま、四郎は建物の中に連行された。建物のどこかの階から、小さな悲鳴が

あがって、すぐに消えた。階段を降り、地下の薄暗い廊下を歩いて、四郎はひとつの部屋に通された。
そこは窓のない小部屋で、配管と電気の配線がむきだしだった。隅に木椅子がひとつ、置かれており、その脇の床の上に、男が仰向けになっていた。
男は上半身裸で、靴を脱がされている。裸の胸や腹が、赤黒く腫れていた。内出血しているようだ。顔も、血で汚れている。それが、アルベールなのかどうか、入口からでは判断ができなかった。
若いゲシュタポが、四郎の背を小突いた。
年配のほうが四郎に言った。
「もう死んでいる。知り合いかどうか、たしかめてくれないかね」
四郎は繰り返した。
「もう死んでいる?」
「そうなのだ。連行して取り調べているあいだに、心臓発作を起こした。まだ自分がアルベール・ロランという男であるかどうか、それも答えないうちだった。よく顔を見てくれないか」
また背中を小突かれた。
四郎はしかたなく死体の前まで歩き、膝を折った。
たしかだ。アルベールだった。二十四歳になる、生粋のパリっ子。戦前に美術学校を卒業した青年で、通信販売会社のカタログ製作の仕事についていた。四郎とも顔見知りだ。彼の以前の恋人が、ムーラン・ルージュの踊り子だったのだ。踊り子は四郎とも親しいユダヤ人の娘で、彼女を通して四郎はアルベールと知り合ったのだった。
そのアルベールが死んでいる。
やつは、と四郎は苦々しい想いを飲み下した。世界中のどんなことにも、自分の意見を持っていた。フランスのナショナリストを笑い、フランス共産党への共感を隠さなかった。スペイン共和国政府の崩壊を自分たちフランス人の責任と感じ、ナチスの増長を許した英仏の指導者たちを激しく蔑んでいた。
いや、なにより彼は、自分自身を呪っていた。恥じていた。恋人の収容所送りを、とめることができなかったから。彼女を救うことができなかったから。彼女と一緒にフランスを脱出する、ということさえ、思いつくことができなかったから。たぶんそのせいだろう。その後、彼がレジスタンスに身を投じたのは。レジスタンスでの危険な任務を、積極的に買って出ているのは。彼の胸の

うちは推しはかるしかないが、きっとそういうことにちがいない。
アルベール・ロラン。いささかかたくなな、青臭い理想主義者。しかし、そのパリを愛する信条の熱さで、この自分を多少なりとも動かしたことも事実だった。あなたの小屋を、冬のあいだ、貸してはくれないだろうかと。パリのために。あなたも愛する、自由なパリのためにと。四郎は、その頼みを断ることができなかった。自分も、あのユダヤ人の踊り子を救うことができなかったことで、いくらかの痛みを感じていたせいかもしれない。
そのアルベールが死んでいる。拷問の跡もなまなましい遺体で、この陰気な地下室に横たわっている。もう物も言えぬありようで。告白も否定も確認もできぬ姿で。
どこの誰だか知らぬが、と四郎は思った。おれの守り神よ、メルスィ・ボクー。おれはどうやら、死に神のキスを受けずにすんだようだ。
四郎は、その場で首を振って言った。
「知らない。見たことはないな」
年配のゲシュタポは、四郎の脇に立って言った。
「では、どうしてサンジェルマン・アン・レーの小屋の鍵を持っていたのだろう。錠前は、壊されていたわけじゃないんだがな」
「見当もつかない。おれの知らない合鍵があったのじゃないかな」
「きみが貸したわけじゃないんだな」
「アパルトマンにもどってみればわかるが、盗まれたのかもしれない。さっきも言ったが、おれはあの小屋を夏しか使っていない。知らないあいだに、誰かが勝手に中に入るってことはありうるんだ」
「もう一度確認するが、この男とは知り合いではないのだね」
「知らん」
「ありがとう」ゲシュタポは言った。「では、これでけっこうだ」
四郎は立ち上がった。思わず身震いが出た。恐怖から解放されたせいか。それとも、むごい死体を前にして、精一杯気を張ったせいだろうか。
ゲシュタポのふたりに従って、あらためて廊下へと出た。もうふたりは、四郎の腕をとってはいなかった。四郎は、足早に廊下を階段の方角へと向かおうとした。
「そういえば」年配のゲシュタポが四郎を呼びとめた。
「ついでだが、こちらの部屋も見てみるかね」

若いほうのゲシュタポが、いま見た部屋の向かい側のドアを開けた。
年配のゲシュタポは言った。
「のぞいてみてくれるか」
言葉の調子には、有無を言わせぬものがあった。
四郎はいぶかりながらドアの前まで進んだ。中にひとの気配があった。荒い呼吸が聞こえてくる。部屋に一歩身体を入れてみて、四郎は息を呑んだ。
知り合いの老人がいたのだ。サンジェルマン・アン・レーの小屋の管理人だ。小屋はもともと、彼の持ち物だった。隠居した元農夫、パッサール老人。
パッサール老人は、アルベールと同様、上半身裸で椅子に腰をかけている。両腕は、椅子のうしろで縛られているようだ。
老人は、四郎を見て、目をいっぱいにひろげた。そのやせた頬に、内出血の赤みがひろがっている。口に唾をためていた。
もう長いこと、拷問が続いていたようだ。老人の肉のない胸の殴打の跡が痛々しかった。部屋にはかすかに尿が匂ったが、老人は失禁していたのだろう。
パッサール老人は、乞うような、あるいはすがるような目を四郎に向けてきた。口が動いた。四郎は意識をパッサール老人に集中したが、声は聞こえなかった。声を出すだけの力が、老人にはもうすでにないのかもしれない。
壁ぎわに、ふたりの男がいた。シャツ姿の、屈強そうな男がふたりだ。老人を手荒に取調べていたのは、この男たちということだ。
年配のゲシュタポが、四郎の横に立って、勝ち誇ったような目を向けてきた。四郎の動揺は、はっきりと顔に出ていたのだろう。
ゲシュタポは言った。
「ご存じですな」
四郎は、この場への嫌悪を隠さずに言った。
「おれの田舎家の管理人だ。パッサール老人。どうして、この人がここに？」
「テロリストをかくまったからだ。たぶん、きみの小屋の鍵を渡したのは、この年寄りだ」
「それを認めたのか？」
「いや。知らぬ存ぜぬと、老体のくせに、しぶとい」
シャツ姿の男のひとりが、年配のゲシュタポに訊いてきた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co